**鈴木　清造 （すずき・せいぞう）**

**１、プロフィール**

昭和初期の旧制中学・官立高校・大学などでの作歌に始まり、中国での捕虜体験・戦後の教壇生活を通して生活を淡々と詠っている。

＜生没＞

1911（明治44）年７月16日 ～ 1976（昭和51）年10月５日

＜代表作＞

歌集『落穂』

＜青森との関わり＞

旧制弘前中学・官立弘高・東京帝大を経て青森女子師範・弘前市教育委員会・弘前実業高校を歴任した。

**２、作家解説**

歌人。明治44年７月16日、弘前市に生まれる。旧制弘前中学校・旧制弘前高等学校を経て昭和10年東京帝国大学文学部教育学科を卒業。この間甲虫短歌会（弘前中学）、弘高短歌会などで歌の素養を積む。大学卒業後、東京の小学校、秋田の商業学校、青森高等女学校、青森県女子師範学校を歴任、17年召集を受けて中国山西省に行き、21年上海から帰還。大学１年、それまでの歌稿を失うという、不幸な事件があったが、それにめげずに旧稿を収集し歌作を続けた。学窓での作品、戦争中の作品の中にも単なる生活詠にとどまらないものがある。22年以後、地元の市役所・教育委員会に勤務したのち、35年弘前市立女子高校に転じ、弘前市立実業高校に勤務する。41年同校内の「なるしすの会」から歌集『落穂』が出版された。41年から51年まで津軽短歌社の代表であった。定年退職後の47年から弘前学院大学教授となった。51年10月５日没した。

学生時代の二首

踏切の女の持てる旗に似て柵べを近みダリヤ咲きたる

街燈のまだ消えやらぬ朝の町寂びれし光（かげ）に霧の流れたる

**３、資料紹介**

〇『落穂』

図書

1966（昭和41）年７月１日

180ｍｍ×140ｍｍ

462首が「旅情」（昭和10～40）、「落穂」（昭和２～９）の二部に構成されている。第二部は、失われた青春の歌稿を収集して成った。このことは著者の書いた後記でふれられている。序文は小田桐孫一が書いた。